前橋市文化財調査報告書

第 1 集

広瀬団地古墳群発掘調査報告

前橋市教育委員会

目　　次

Ⅰ　はじめに …… 1頁

Ⅱ　調査地域の環境 …… 2

Ⅲ　調査の経過 …… 3

Ⅳ　調査の結果 …… 6

(1)　墳丘測量を行なつた古墳について …… 6

①　上毛古墳綜覧上陽村第３号（ボンゼン塚）古墳 …… 6

②　〃　第５号（オトウカ山）古墳 …… 6

③　〃　第１３号　古　墳 …… 6

④　〃　第２０号（亀　塚　山）古墳 …… 6

(2)　発掘調査を行なつた古墳について …… 6

①　上毛古墳綜覧上陽村第２４号古墳 …… 7

②　〃　記載漏　大塚北古墳 ……

Ⅴ　あとがき …… 15

挿　図　目　次

第１図　調査地域古墳分布図

第２図　発掘作業（写真）……4頁

第３図　ボンゼン山古墳墳丘測量図……16

第４図　オトウカ山　〃……17

第５図　上陽村第１３号　〃……18

第６図　亀塚山　〃……19

第７図　上陽村第２４号　〃……20

第８図　〃　石室実測図……21

第９図　鉄鏃実測図……22

第１０図　直刀　〃……22

第１１図　轡　〃……23

第１２図　鉄鋌　〃……23

第１３図　鉸具及び玉類　〃……24

第１４図　高坏（須恵器）　〃……24

第１５図　大塚北古墳墳丘測量図……25

第１６図　〃　断面実測図……25

第１７図　〃　埋葬施設実測図……26

第１８図　〃　出土遺物実測図……26

図　版　目　次

1. ボンゼン山古墳 …… 27頁
2. オトウカ山古墳 …… 27
3. 亀塚山古墳 …… 28
4. 24号古墳及び大塚北古墳 …… 28
5. 24号古墳全景 …… 29
6. 24号古墳羨道入口部 …… 29
7. 24号古墳羨道部 …… 30
8. 24号古墳玄室部 …… 30
9. 24号古墳玄室北区遺物出土状態 …… 31
10. 〃　中央区　〃 …… 31
11. 〃　南区　〃 …… 32
12. 大塚北古墳全景(一) …… 32
13. 〃　(二) …… 33
14. 〃　葺石及び埋葬施設 …… 33
15. 〃　埋葬施設 …… 34
16. 上両家二子山古墳 …… 34
17. 金冠塚（二子山）古墳 …… 35
18. 山王大塚古墳 …… 35

第１図　調査地域古墳分布図

1. 天川二子山古墳
2. 不二山古墳
3. 八幡山古墳
4. 天神山古墳
5. 正円寺古墳
6. 飯玉神社古墳
7. 上両家二子山古墳
8. 乞食塚古墳
9. ボンゼン山古墳
10. オトウカ山古墳
11. 亀塚山古墳
12. ２４号古墳
13. 大塚北古墳
14. 山王大塚古墳
15. 金冠塚（二子山）古墳
16. １３号古墳
17. 文珠山（オーボ山）古墳

広瀬団地古墳群発掘調査報告

松島栄治
笹岡規雄

I はじめに

昭和42年3月、県立前橋工業高校教諭松島栄治及び同校歴史研究部（部長笹岡規雄）は、前橋市教育委員会から、同市宅地造成組合が宅地造成を進めている広瀬団地内に所在する古墳調査の依頼を受けた。

ところで、この広瀬団地は、旧勢多郡上川渕村字後閑から旧佐波郡上陽村字山王地内にかけて造成するものであるが、この地は群馬県においても古墳の群集地帯として有名な所で、昭和10年に刊行された上毛古墳綜覧によれば、実に百数十基の古墳の存在が確認されている。しかるに、第二次大戦中から戦後にかけての開墾は、この地においても他地域の例にもれず、多数の古墳を破壊し消滅させてしまい、昭和41年の宅地造成計画時における古墳の数は約63基とされている。これら古墳に対し、前橋市教育委員会は、同市文化財専門委員会にはかる一方、県教育委員会の指導を得て

① 破壊を禁止する古墳　6基
② 調査の上処置する古墳　17基
③ 整地をする古墳　40基

とし、古墳の保護と調査活動に当つたのであつた。

発掘調査の依頼を受けたわれわれは、直ちに現地を視察し、上記③に当るものは、既に壊滅し僅かに痕跡を止めている程度であつたので、この調査はあきらめ、上記②に当るものの調査に専ら当ることとした。

調査は、これら古墳群が、北方に隣接する朝倉古墳群に匹敵する古墳群なので、広瀬古墳群と命名し、県立前橋工業高校歴史研究部の昭和42年度行事として、同年3月17日から墳丘の測量を開始し、3月25日からは発掘調査にとりかかり、4月2日に一おう終了した。この間、調査を行なつた古墳名及び所在位置は下記の通りである。

○発掘調査を行なつた古墳

① 上毛古墳綜覧上陽村第5号（オトウカ山）古墳
前橋市領家町木之宮145～147番地

② 上毛古墳綜覧上陽村第24号古墳
前橋市山王町字法尺寺262番地

③ 上毛古墳綜覧記載漏（大塚北）古墳
前橋市山王町字大塚174番地

○墳丘測量のみを行なつた古墳

① 上毛古墳綜覧上陽村第3号（ボンゼン山）古墳
前橋市領家町甲228、乙2228番地

② 上毛古墳綜覧上陽村第13号古墳
前橋市山王町字田尻480、481番地

③ 上毛古墳綜覧上陽村第20号（亀塚山）古墳
前橋市山王町字法尺寺304番地

また調査の参加者は次の通りである。

○発掘調査担当者　松島栄治
○発掘調査員　北爪光成　梅沢　栄　笹岡規雄　狩野季男　永井良伸　小林　勝　都丸和芳　宮口宗久　中島　厚　堀越八十二

以上のほかに、県立前橋高校、同女子高校及

び前橋市立女子高校の関係各クラブ有志の協力を得た。

また、発掘調査に伴う諸準備及び事務的な仕事は、前橋市教育委員会社会教育課が担当し、御多忙のところ、社会教育課長近藤義雄、管理係長小海国好、社教主事阿久津宗二各先生には特別の御尽力と御支援を得た。尚、報告書の作成に当つては、群馬大学尾崎喜左雄博士をはじめ同研究室の人々から種々御教示を受けた。ここに記して篤く感謝の意を表すると共に深く御礼を申しあげる次第である。

Ⅱ 調査地の環境

広瀬古墳群は、前橋市の南端部、朝倉古墳群に南接して所在する。

広い関東平野の北西部に、舌のように張り出した群馬県の平野部へは、山地に発した幾条もの河川が流れ込み独特の景観を形づくつている。こうした小河川の１つである広瀬川は、利根川から別れて赤城山西南麓をめぐり、前橋市街地を横断した後、流路を東南方向にとつて流れ去る。古墳群はこの広瀬川の右岸、５～６mの比高をもつ段丘上に形成されている。標高は約80mであり、傾斜はわずかに北に高い。今、この地に立つて西方を見渡せば、段丘上面はわずかなうねりをもつ平坦地が続き、遙かに浅間山を望む。また東側には広瀬川、国鉄両毛線前橋一伊勢崎間が走り、北方には雄峰赤城山、北西には小野子山、榛名諸連山を望むことができる。

土壌は、第４紀の旧河床礫層が数mの厚さで基盤をなし、その上部は地表まで約１mの厚さに数層の堆積を認めることができるが、その中には度々の河川の氾濫による砂質層や火山灰層が含入し、遺跡の関連を知る上でのキーベツドとなつている。また、この地域は榛名山の一峰二ツ岳の噴出物である浮石質紡錘状角閃石安山岩が古墳に使用された地域でもあり、これらは古墳の年代推定にあたつての指標となつている。

従来この地域の考古学的な調査は、古墳に関して進められているのみで、住居跡・集落等の調査は今だに一例も行なわれておらず、わずかな表面採集の資料があるに過ぎない。先土器時代の遺物は、現在までのところ全く確認されていない。縄文時代に至つて、後閑町出土の前期諸磯式土器、山王町出土の中期加曾利Ⅱ１式土器、後閑町出土の安行式土器（いずれも数片）が発見されている。弥生時代の遺物も縄文時代の遺物と同様に少なく、わずかに山王町からの後期に属する樽式土器（１片）、後閑町から同じく後期に属する弥生町式土器（２個体）の出土があるのみである。現在迄の資料では即断は許されないが、概して縄文・弥生両時代には継続的な生活の跡はたどり難い。それに対して古墳時代の遺物の出土は莫大な数量に達し、殆んど全域に渡つて土師器が散布し、その時代相も石田川式土器から連綿として認められる。この背景のもとに突如として権力の象徴である古墳が築造され、その示す時代相も群馬県に於ける最古式のグループに属すものから終末期に至るまで「上毛古墳綜覧」によれば総数７０余基（前方後円墳１２、円墳６０余）が確認されている。その中には全長１２９mを計り豊富な副葬品と長大な埋葬施設の出土した後閑町の天神

山古墳、全長８０数mを計る上両家二子山古墳、東京国立博物館所蔵の天冠を出土した金冠塚（二子山）古墳など世に知られているものも多い。古墳時代を過ぎると、再びこの地域は忘れ去られたようにわずかに磁器片が散布しているのみである。このことは、朝廷による中央集権機構が整備化され、前橋市西部に上野国の中心が設定された結果、人民分布の様相もそれなりの影響を受けたものと考えられる。

Ⅲ　調　査　の　経　過

３月１７日

調査者の集合を待つて正午近くになつてから作業を開始した。

オトウカ山古墳の墳丘測量を終了した。

３月１８日

雨のため作業中止

３月１９日

禅養寺の西側に所在する第１３号古墳の墳丘測量を開始し、墳丘の約半分を終了した。

３月２０日

１３号古墳の墳丘測量を終了した。

３月２１日、２２日

作業中止

３月２３日

第２４号古墳の墳丘測量を終了した。

墳丘測量の目的を達成し、３月２５日から開始される発掘調査に備えた。

３月２５日

全員第２４号古墳に集合し、調査班を編成した。

（１班：２４号古墳調査
２班：オトウカ山古墳調査）

２４号古墳

墳丘頂上部から南西方向へ墳丘裾部に到る第１トレンチ（以下１Ｔという）、１Ｔの反対側墳丘頂上部から東北方向墳丘裾部に到る第２トレンチ（以下２Ｔという）、墳丘頂上部から南へ墳丘裾部に到る第３トレンチ（以下３Ｔという）を設定した。１Ｔからは羨道壁らしき石組、２Ｔ・３Ｔからは裏込外側の被覆石組が発見された。

オトウカ山古墳

墳丘頂上部から北方へ墳丘裾部に到る第１トレンチ（以下１Ｔという）を設定し、同時に調査前から切断されていた墳丘の断面を精査した。１Ｔからは原位置でない石が多数発見されたが、埋葬施設、葺石石組などは確認されなかつた。

３月２６日

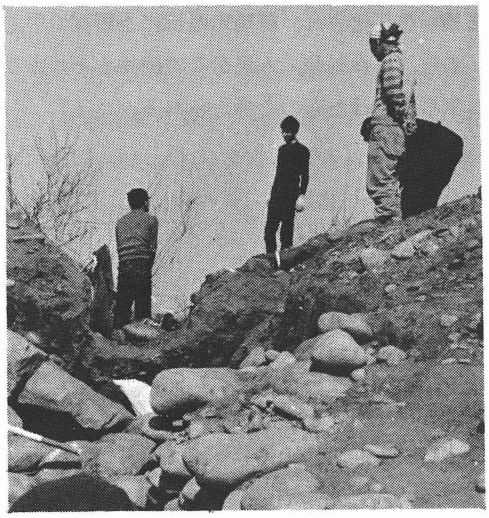
２４号古墳

３Ｔの延長に墳頂から墳丘裾部へ到る第４トレンチ（以下４Ｔという）を設定、２Ｔ・３Ｔはトレンチ幅を広げた。１Ｔの状況からして本古墳の埋葬施設は横穴式石室であると判明した。４Ｔからは、２Ｔ・３Ｔと同様に裏込外側被覆施設の石組が発見された。

オトウカ山古墳

墳丘頂上部にピット１を、それより１m南にピット２を設定した。墳丘断面は昨日の継続であつた。ピット１・２共に埋葬施設、葺石等の遺構は確認されなかつた。

オトウカ山古墳の調査を中止し、２班は上毛古墳綜覧記載漏れ大塚北古墳の調査を午後から



始めた。

大塚北墳

墳丘測量を行なつた。墳丘頂上部から西方へ墳丘裾部に到るＡトレンチ（以下ＡＴという）を設定した。ＡＴにより葺石石組が発見されたため、ＡＴの西端から南へＢトレンチ（以下ＢＴという）ＢＴの南端から東へＣトレンチ（以下ＣＴという）を設定した。ＡＴ・ＢＴにより葺石根石が直線状にあることが判明した。ＣＴからは葺石石組は発見されなかつた。

３月２７日

再び測量班を編成し、調査の急がれる古墳の墳丘測量を行なつた。

２４号古墳

羨道入口部の南に第５トレンチ（以下５Ｔという）を設定した。３Ｔの幅を広げた。１Ｔは羨道部を掘り進むと共に、玄室部の位置を掘り下げた。他は昨日の作業を続行した。

大塚北古墳

ＡＴを掘り下げると共に、ＢＴを北に延長しＢ′トレンチ（以下Ｂ′Ｔという）とした。Ｂ′Ｔの北端部から東方へＤトレンチ（以下ＤＴという）を設定した。ＡＴの墳丘頂上部から長さ約８０cmの浮石質紡錘状の角閃石安山岩が発見された。

測量班

上毛古墳綜覧上陽村第３号＜ボンゼン山＞古墳の墳丘測量を行ない、半分程度の作業を終了した。

３月２８日

２４号古墳

５Ｔの南端から東へ第６トレンチ（以下６Ｔという）を設定、他に墳丘南東部にピット１を設定した。６Ｔ・ピット１からは葺石石組は発見されなかつた。

大塚北古墳

墳丘東側の裾部へ南一北にＥトレンチ（以下ＥＴという）墳丘北西部にピットＡを設定した。ＥＴからは移動した状態の石が多数発見された。

測量班

ボンゼン山古墳の墳丘測量を終了した。

３月２９日

２４号古墳

昨日の作業の続行。１Ｔは羨道部をほぼ掘り終え、２Ｔ・３Ｔ・４Ｔ・５Ｔは実測を残すのみとなつた。

大塚北古墳

墳丘の北東部にピットＢ、南西部にピットＣを設定し、ピットＡと共に墳丘盛土の状態を確認した。ＡＴの墳丘頂上部を広げ、表土に近い位置から鉄刀鋌部・鏃片等が発見され、褐色の礫床やそれを巡る石組遺構が発見された。

測量班

上毛古墳綜覧上陽村第２０号＜亀塚山＞古墳

の墳丘測量を行ない、作業の約半分程度を終了した。

3月30日

24号古墳

玄室内から馬具・武器類が発見された。2T・3T・4Tの実測を開始した。

大塚北古墳

埋葬部を掘り終え、平面実測を開始し、同時に葺石の一部の実測を開始した。

測量班

亀塚山古墳の墳丘測量を終了した。測量班を解散し、班員は1班に合併した。

3月31日

24号古墳

作業は玄室部を主として進められた。羨道部及び羨道入口部、裏込外側被覆の石組にかけての実測を開始した。

大塚北古墳

墳丘断面、ピットC、昨日からの続きの実測を終了した。本古墳に関する調査は終了した。

4月1日

24号古墳

羨道入口部にピット2を設定した。玄室部から玉類・武器類が発見され、実測を開始し、羨直部の実測を終了した。

宿舎では器材・遺物等の整理を行なつた。

4月2日

24号古墳

昨日からの実測を終了した。

宿舎で再度荷物を整理した後、帰途についた。

Ⅳ 調 査 の 結 果

(1) 墳丘測量を行なつた古墳について

① 上毛古墳綜覧上陽村第３号（ボンゼン塚）古墳

上陽村第２号（乞食塚）古墳の南側に位置し、発掘調査を行なわずに破壊平夷された。墳丘は、測量前から破壊が著しく、西側半分を失なつていたが、円墳と考えられる。墳丘復元径約２５ｍ、高さ（周囲の畑より）２ｍ余であり、周堀は周囲の畑からは明らかでない。古墳綜覧には埴輪片が見られると記されているが、破壊平夷される際に円筒埴輪下半部を発見した。上毛古墳綜覧には「所有者ノ同意ヲ得テ発掘ス」と記されているが、その内容は不明である。

② 上毛古墳綜覧上陽村第５号（オトウカ山）古墳

上陽村第３号（ボンゼン塚）古墳の東側に位置し、我々の測量後に破壊平夷された。墳丘は以前に．西側約⅓を失なつていたが、さらに広瀬団地を南－北に走る道路によつて西側半分が破壊された。円墳と考えられ、復元径約３０ｍ、高さ（周囲の畑より）３ｍ５０ｃｍ余であり、周堀部は周囲の畑からも明らかでない。埋葬施設、葺石は攪乱を受けており、確認されていない。上毛古墳綜覧には「発掘サル」と記されているが、その内容は不明である。

③ 上毛古墳綜覧上陽村第１３号古墳

上陽村第１４号（金冠塚）古墳の南側に位置し、発掘調査を行なわずに破壊平夷された。上毛古墳綜覧台帳には南東に面する前方後円墳と表わされているが、前方部及び後円部南半分、後円部西側裾部は宅地化し、平夷されていた。後円部復原径約６５ｍ、高さ（周囲の水田より）約５ｍであり周堀は周囲の水田等からは明らかでない。本古墳が破壊される際に埴輪は１片も発見されず、埋葬施設も確認されなかつた。

④ 上毛古墳綜覧上陽村第２０号（亀塚山）古墳

上陽村第２４号古墳の北東、広瀬川の西側約５０ｍに位置し、現在保存されている。南々西に面する前方後円墳であるが、前方部の長さが短かく所謂帆立貝式の古墳である。前方部は畑の状態からすると南側を10ｍ程度削り取られていると推察され、くびれ部や後円部墳頂部もかなり破壊を受けている。墳丘主軸復元長約６０ｍ、後円部復元径４０ｍ、高さ（周囲の畑より）約６ｍ５０ｃｍ、くびれ部復元幅約１５ｍ、高さ（周囲の畑より）約1.5ｍである。前方部は、畑の状態により、くびれ部とほぼ同じくらいの幅であると推定される。埴輪片は数多く採集される。

(2) 発掘調査を行なつた古墳について

オトウカ山古墳は、前記したように埋葬施設及び葺石等は既に攪乱受け、今回の調査では確認されなかつた。したがつて、上陽村第２４号古墳及び大塚北古墳に関して発掘調査内容を報告することにする。

(1) 上毛古墳綜覧上陽村第２４号古墳

本古墳は、上陽村第２０号（亀塚山）古墳の南西、大塚北古墳の北西に所在していた。しかし、この調査後まもなく広瀬団地の造成に伴ない破壊平夷され、現在はその痕跡も認められない。尚「群馬県の遺跡」には「円墳で頂上部はかなり平らにされ畑になつている。西斜面には石室に使用したとみられる自然石がある。埴輪片もみられる」と記載されていた。

(イ) 墳　丘

外形測量図によると直径２５m程度の円形墳で、高さ（周囲の畑より）約２m５０cmであつた。北部はすでに開墾等によつて一部が削り取られ小木や篠等が繁り、南部は傾斜が緩やかになつて桑畑が墳丘上にまで続いていた。頂上部は以前は畑として利用されていたが、調査時には荒地化していた。南西部中腹には、後に羨道部天井石と判明した硬質角閃石安山岩の巨石が地表に露出していた。

調査の結果古墳は黒色土上に営まれ、基壇の高さは約１m.で、その上に横穴式石室が構築されており、２段築成であることが判明した。

基段の底の径は判然としないが約２５m、基段上の積土の径は約２０m.と推定される。また墳丘の各所で破壊攪乱が認められ、特に頂上部、北部は全く原形を止めていないことが判明した。

従つて墳丘高は不明である。石室前庭部を除いて葺石は各トレンチのいずれからも明確な形では発見されなかつた。

(ロ) 石　　室

石室は、Ｓ－３５°Ｗの方向（羨道部主軸）へ開口する横穴式石室であるが、その玄室はＮ－４０°Ｗの方向に主軸を向け、玄室西壁の中ほどに狭長な羨道部を直交連絡させたＴ字形の平面形をもつものであつた。玄室部と羨道部との境には梱石等は発見されていないが、床部敷石及び壁石の状態が明らかに相違していたため、これにより区別することができる。

筆者の定めたポイントにより石室寸法値を出すと下記のとおりである。

石室全長	
羨道右壁寄り	9m.50cm
羨道左壁寄り	9m.40cm
玄室長	
短辺（幅）	
中央付近	1m.80cm
北壁寄り	1m.70cm
南壁寄り	1m.70cm
長辺（長さ）	
中央付近	5m.20cm
東壁寄り	5m.15cm
西壁寄り	5m.25cm
羨道部長	
全長	
右壁寄り	7m.65cm
左壁寄り	7m.60cm
幅	
羨道入口部	80cm
玄室入口部	1m.2cm
玄室西壁長さ	
玄室北壁－玄室入口部左石	2m.22cm
玄室南壁－玄室入口部右石	2m.5cm

玄室部

主軸を羨道部とほぼ直交させた長方形の平面形を呈している。天井石は1石も発見されず、側壁もほぼ上半分は取り除かれ、或は崩壊していた。

床部は、径約20cm、厚さ約10cmの偏平な敷石が玄室主軸付近で最も高く、玄室西壁及び東壁付近では低い形を呈し、玄室各壁に隣接したところで急下降して深さ約10cmの溝を成して、一面に敷かれていた。敷石の下には白色粘土が厚く認められ、敷石の上には約10cmの厚さで小礫を含む河原砂が覆い、河原砂の上面から副葬遺物が発見されている。また羨道左壁の延長上に2石、羨道右壁の延長上に3石、やや玄室北壁側に片寄つた状態で長径40～55cm短径25～30cmの河原石が白色粘土上に並置されていた。羨道左壁延長上の2石の河原石の間は、同様の大きさの石を置くに充分なスペースで白色粘土が露呈していたので、この部分にも石が置かれていたものと推察された。これらの石は間仕切石であると思われる。

側壁は河原石を加工を施さずに用いた乱石小口積で、その根石にはやや大きめのものが置かれ、根石の上には長径30～60cm、短径20～30cmの石が積まれ、間隙には数は少ないが長径20cm、短径5cm程度の石を詰めて補強してあつた。各壁の状態を下記すると次のとおりである。

玄室東壁は、その根石に11石を用い、最高1mのレベルまで石組が残つていた。根石列は、中央付近で南・北両壁との接合部を結んだ線よりも10cm程度弧状に東側へ広がつた胴張りであつた。また壁面は、間仕切石付近で強く、南・北壁との接合部付近ではわずかに玄室主軸側に内傾する所謂ころびが認められた。

玄室南壁は著しく崩壊し、東壁との接合部付近を除いて根石が残つていた程度である。玄室東壁の内側に積み上げられたその根石列は、玄室東壁付近で僅かに内側にはいつていた。

玄室西壁の玄室入口部の南は、根石のみ残つていた程度である。玄室入口部の1石は特に大ぶりな石が用いられていた。

玄室西壁の玄室入口部の北は、北壁に近いところでは最高1mのレベルまで石組が残つていたが、玄室入口部付近は根石のみ残つていた程度である。玄室入口部の1石は、床部の間仕切石に接するほど玄室主軸側に突出させていた。壁面は東壁と同様にわずかなころびが認められた。

玄室北壁は、根石に3石（内2石は高さ約40cm、幅約80cm）を用い、最高1mのレベルまで石組が残つていた。

羨道部

狭長な羨道部は、玄室西壁の中央部から南西方向へ開口していた。羨道入口部から約4mのところには、調査前から地表に露出していた長径1m20cm、短径75cmの硬質角閃石安山岩があり、それより羨道入口部側に接しては長径1m20cmの河原石が発見された。角閃石安山岩の玄室入口部側からは、羨道左壁に乗り羨道右壁にくい込むような状態で2m×2m、厚さ約50cmの石が発見され（上記3石は羨道部天井石と判明）その下に長径70cm程度の河原石数石が認められたが、この部分は羨道壁も内側にせり出していたため取り除くこと

ができなかつた。

塡塞には、羨道入口部付近で長径２０～４０、短径１０～２０程度、中ほどでは大ぶりな河原石が用いられていた。しかし、玄室入口部近近では攪乱が著しく、崩壊した側壁との判別が困難であつた。

床部には径約１５cm、厚さ１０cm程度の均一でない河原石を用いた敷石が並べられ敷石上には厚さ約５cmで玄室部と同様に小礫を含む河原砂が一面に敷かれていた。羨道入口部の敷石上面のレベルは玄室中央部付近の敷石上面に比較すると約２０cm高い位置にあり、玄室部に向つてわずかに下降していたとみられる。

また、玄室入口部付近では、敷石が左右側壁の根石に隣接したところで下降し、細いミゾとなつて玄室部のミゾと続いていたが、羨道入口部付近では発見されなかつた。

側壁は、長径３０～６０cm、短径２０～３０cm程度の玄室部に比べて小ぶりな河原石が用いられていた。

左壁は、破壊が著しく、殆んど原形を止めていない状態で発見された。根石列は、ほぼ直線状の配列を成しているが、玄室入口部付近でわずかに広がる傾向が認められた。

右壁は、羨道入口部から５m程度のところまでは約１m２０cmのレベルまで石組が発見され、原形を保つているものと推定されたが、玄室入口部付近では盗掘による攪乱により根石を残していた程度である。根石列は羨道入口部右石がやや内側に突出し、それより４mのところまでは直線状の配列をなしていたが、玄室入口部の付近では弧状のカーブが認められた。

羨道部と被覆石組との境の石は、長径５０～７０cm、短径１５～２０cmの河原石が用いられ、右に４石、左に２石発見された。

㋑　石室被覆施設

石室の壁を被覆する石組は、長径１０～３０cm、短径５～２０cm程度の河原石を用いた乱石小口積で、強固に構築されていた。確認された部分の石組は、底部ではほぼ垂直に立ち上り、上部へ行くに従がいアーチ状に石室側に内傾していた。

石組根石部のプラン寸法値を下記する。

２Ｔ石組－４Ｔ石組	≒	１１m
２Ｔ石組－玄室南壁	≒	３m
３Ｔ石組－玄室東壁	≒	３m
４Ｔ石組－玄室北壁	≒	３m

羨道入口部付近の被覆石組根石の配列は、羨道部主軸に対して右（南）側で８５度、左（北）側で６０度である。羨道入口部付近の被覆石組は、同時に墳丘を廻る葺石の１部といえるが、その部分の長さが右側は２m余であるに対して左側は３m余であつた。各石組の根石底部レベルを下記する。（玄室部中央付近の敷石上面レベルを０として）

墳丘構築面	－約	９０cm
羨道入口部石組	＋約	２０cm
２Ｔ内被覆石組	－約	３０cm
３Ｔ内被覆石組	－約	２０cm
４Ｔ内被覆石組	－約	２０cm

なお、石室壁と被覆石組との間は、石室壁付近で礫を含む河原砂が用いられ、被覆石組に近いところには土が詰められていたが、詳細は不明である。

(二) 遺　物

埴輪は各所から数多く出土し、円筒埴輪、形象埴輪（人体腕部など）も確認されている。しかし、その全てが破片であり、原位置から移動していたものである。

土師器、須恵器も少数ながら発見されているが、埴輪と同様に大部分が細片であつて、わずかに、羨道入口部付近から発見された須恵器の高坏は、古墳と直接的関連があるとみられる。

石室内出土遺物のNo.1は、明治10年発行の半銭銅貨であり、No.2は、羨道右壁攪乱部（羨道部敷石面から50cm高い位置）から発見された鏃片であつて、すでに石室内は盗掘を受けていることが知られた。このことを考えると、玄室部もすでに盗掘を受け、埋葬遺物もそのいくつかは古墳外へ持ち去られたと推定するのが妥当である。

玄室部床面から発見された遺物は、いずれも玄室東壁寄りの3個所にまとまつた状態で出土した。玄室部は、前に述べたように左右羨道壁の延長線上の間仕切石によつて3区に分けられるが、遺物はその3区ともに発見されている。北区の遺物は玄室東壁と玄室北壁の接合部付近から、中央区の遺物は羨道部主軸線の延長と玄室東壁の接合部付近から、南区の遺物は玄室東壁と平行に発見された。各区の出土遺物を下記する。

北　区　　直刀2振（直刀②、刀鋩部）
　　鉄鏃7本（4～10）
　　管玉5個
　　小玉71個
　　鉄片若干

中央区　鉄鏃3本（1～3）
　　轡　1組
　　鉄鋌6個
　　鉸具（尾錠）　2個（？）

南区　　直刀　1振

各遺物の説明を下記する。

(a)　武器類

鉄鏃

（1～3）

平面は片刃箭式の形状であるが、身部の両側に刃を有していることから直にその名称を使用できない。身は両刃ともほぼ同じ長さをもち、断面は片側にのみ丸みを持つ直弓の形で、先端部は逆刺（かえり）の付いた一方へ曲つた薙刀の形である。篦被部は長く、片側に逆刺を付設し、断面は逆刺部で切刃造りの刀の断面に類似するが、他の部分は長方形で、茎との境に棘が付いている。茎部は鉄鏃4～7に比べて短く、茎先に近いほど細くなり、ところどころで矢端の木質が認められ、断面は棘に近い部分は角のとれた方形で、茎先に近くなるほど丸味を増し、茎先付近では円形である。

なお逆刺部は、身との境の凹部（この片側は関）から始まり、2cmほどの部分が断面三角形で篦被と稿を形成して接したのち、鉄鏃1に見るような鋭い、いかにも腸肬の名を思わせる部分が突き出ている。

同類の鉄鏃を実見する機会に恵まれていない現在までのところ、本鉄鏃を片刃箭式の一タイプとみなし、片側に逆刺部の付いたものと註記するに止めたい。

（４～１０）

尖根型に属し、身部の両側が中央付近でわずかに内彎して柳葉式と呼ぶにふさわしい。身部の断面は片側にのみ丸味を持つ直弓の形で、篦被との境には心もちかえりをもつ関が形成されている。篦被部は長く、断面は長方形で、茎との境の棘は鉄鏃１～３のような小突起状のものと三味線のバチのように広がつて茎との境にはつきりとした段をもつものとがある。茎は茎先に近ずくほど細くなり、ところどころで矢柄の先端の木質が認められ、断面は棘に近い部分は角のとれた長方形で（鉄鏃１０）茎先に近い部分は円形となつている。

表２　鉄鏃寸法表　　（単位：cm）

位置 ＼ 鉄鏃No		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
全長		—	15.5	15.5	15.7	—	15.8	—	—	—	—
身部	長さ	4.5	5	4.5	2.5	2.5	2.9	—	2.5	2.5	2.9
	幅（中ほど）	1	1	0.9	1	1	1.2	—	1	1.1	1.2
	厚さ（中ほど）	0.25	0.25	0.2	0.2	0.2	0.4	—	0.15	0.25	0.2
篦被部	長さ	7.5	8	8.3	8.6	7.8	8.1	—	—	6.6	8.5
	幅（中ほど）	0.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.6	—	0.6	0.5
	厚さ（中ほど）	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	—	0.3	0.35
逆刺部	長さ	2.5	2.5	2.1	—	—	—	—	—	—	—
	幅（中ほど）	0.1	0.2	0.1	—	—	—	—	—	—	—
茎部	長さ	—	2.5	2.7	4.6	—	4.8	4.9	—	—	—
	幅（棘付近）	0.6	0.7	0.5	—	—	—	0.8	—	0.4	—

直　刀

(1)　鋒部を南に、刃を西に向け、玄室東壁と平行に置かれ、原位置を動いていないものと推察された。全長１ｍ７cm、鉄製平造の大刀で、錆や腐触も比較的少なく、完形品である。身は角背で、ゆるやかなカーブのふくら鋒部を有し、鋒部付近からわずかづつ身幅及び背幅を増して、柄部に装着されるわずかな段をもつた片関のところで最大となる。身部の長さ８５cm５mm、鋒部付近の身幅３cm５mm、背幅８mm、刃関の部分の身の幅４cm５mm、背幅１cm２mm。茎部は、関部から背及び関側とも内傾し、厚さも関側に対して背が厚い台形断面のままわずかづつ寸法を減じて、柄部へ強固に装着するよう段をもつて細くなつている茎先部へと続いている。茎先から４cmと１４cm５mm関に近い位置には径５mmの目釘孔が穿たれ、またところどころに柄部の木質が認められる。茎幅は、関部のところで３cm、茎先付

近で2cm、茎先で8mm、厚さは茎の中ほどで背側9mm、関側6mmである。

(2) 著しく破損した状態で、玄室北壁と平行して発見され、原位置をわずかに移動しているものと推察された。大刀の身部であると思われるが、鋒部及び茎部は発見されていない。角背で、鉄製平造。比較的保存の良いところで身の幅2cm 8mm、背幅8mmである。

（鋒部）

直刀②と伴出した。著しく腐触し、崩壊し、製作時の寸法は予想できない。わずかに鋒のふくらが認められ、残存部長9cm 2mmを測る。これと同位置から多数の鉄片が出土したが、接合はできなかつたけれども本刀と同一なものであることが推定される。

(b) 馬具類

轡・銜・鏡板・引手が連結された形で発見された。著しく腐触しており、銜のところで2つに割れ、鏡板の1つは3分の1程度を欠損していた。銜は他に多く見られる2連式で、一辺7mmの鉄製角丸角棒の両端を外径2cm 5mmと2cmの環に丸めた長さ8cmのもの2つを、1端（径の小さい環）は互いに組み合い、他端（径の大きい環）は鏡板と引手に連絡されている。鏡板は、一辺8mmの鉄製角丸角棒を最長外径9cm、最短外径6cm 5mmの楕円形に折り曲げたものである。引手は、銜と同じような鉄製角丸角棒の両端を外径2cm 5mmの環に丸めた長さ15cm 5mmのもので、1端の環は銜に連結され、他端の環は引手の中心線に対して約5度の角度を持つて曲げてある。

鉄鋲　3cm×3cmの正方形のものが3個、3cm×2cmの長方形のものが3個発見された。ところどころに裂がはいり、錆も多く付着しているが他の金属は付着していない。正方形タイプのものには4個、長方形タイプのものには2個と径1cm、厚さ5mm程度の笠形の頭が付いており、頭と同じ数の針（ハリガネ状の突出部）が頭と反対側に突き出ている。針の遺存状態は悪く、有機物が付着し大部分が折損しているが、正方形タイプのものの中に一辺の側に折り曲げられているものがある。

また、長方形タイプのNo.6は片側の頭及び針がとれて長方形板に小孔がみられることから、板部に対して頭・針は別個に作られたのちに組み合わされたものと考えられ、6個の鉄鋲とも同様な製作方法によると推定される。

厚さ（針部を除く）は正方形タイプのものが7mm～1cm 2mm、長方形タイプのものが7mm～9mmである。

出土状態などから、馬具の皮止めに使用されたものと思われる。

鉸具（尾錠）　破片の状態で発見され、最低数2個が確認できる。他の金属の付着はみられず、いずれも径6mm程度の鉄丸棒を折り曲げて作られている。長さ約5cm 5mm、幅約4cmと推察される。

(c) 玉　類

管玉、碧玉製であり、深緑色を呈し、中には白い縞模様をもつものがある。穿孔は全て片側から行なわれ、穿ち終りの側にはいずれも皿状のくぼみが認められる。外形寸法は、径5mm、長さ（1～）1cm 5mm、1cm 6mm、1cm 9mm、2cm 2

mm、2cm3mmである。孔径は、穿ち始めで2mm、穿ち終りで0.5mmを測る。

小玉、いずれもガラス製であり、総数の内訳は青色41個、青緑色15個、緑色10個、黄色5個となつている。

外形寸法は径3mm、厚さ2mm程度が一般であるが、稀に径6mm、厚さ4mm程度のものもある。

(d) 羨門前出土上器

高坏　器体の½程度を欠損している。出土位置が石室構築面と密着していたため、古墳との関連性を指摘し得る。胎土中には砂粒を含み、焼成は粗雑であり、全体的に暗灰白色を呈する。坏部はふつくらとした丸味を持つ椀形で、口辺は直立し、中位には2本の横線が走り、横線の下には浅くデリケートな櫛描波文が施されている。脚部は坏部の高さと同じ位で、広きのやや大きい三味線のバチ形を呈し、3個の縦方向の長三角形を呈する透しが1段で穿たれ、下部には2本の綾線が横走する。全高17cm、坏部高8cm、脚部高9cm、口縁部外径18cm5mm、受け部(くびれ部)外径5cm5mm、脚部下部最大径14cmである。

② 上毛古墳綜覧記載漏　大塚北古墳

本古墳は、山王大塚古墳の北々西、24号古墳の南東方向に所在していた。しかし、この古墳も我々の調査後に広瀬団地の支道が墳丘の中央を通過し、破壊平夷された。

(イ) 墳　丘

外形測量図によると径約15mのやや南々西に長い長楕円形を呈し、高さ(周囲の畑より)は1m20cm程度であつた。墳丘上には以前小菜などが植えられていたが、調査時には荒地化していた。墳丘裾部には桑畑が続き、周堀の跡は周囲の畑からは明らかでない。

墳形は、墳丘の南西部に設定したトレンチから発見された葺石の配列に特異性が認められ、その根石が直線状に並べられていることから、方墳という県下でも珍らしい形状を呈すことが判明した。しかし、葺石が石組を成して発見されたのは墳丘南西部の一辺11m程度のみで、他には発見されなかつた。

墳丘の北西部からは、明らかに後世になつてから墳丘裾部を切削つて投げ込まれたと考えられる径20cm程度の河原石が各所にまとまつた状態で地表面下40cm～1mの位置まで発見された。その分布状態は墳丘南西部の葺石根石列とほぼ平行であつた。

墳丘の北東部では、墳丘北西部と同様に墳丘南西部の葺石根石列とほぼ平行の分布状態で、墳丘裾部を切削つて投げ込まれたと考えられる河原石が発見された。

墳丘南東部では、河原石が地表面下20cmの位置から発見された。

墳丘の南西部から発見された葺石は径20cm程度の小ぶりな河原石を用い、墳丘積土に一面で積み上げられ、自然石乱石積による強固な造りであつた。地表面とは40度の角度を持ち、その根石は水平に置かれ、根石と同じ大きさの石が墳丘積土と直角に組み上げられていた。葺石の根石列はN30°Wの角度を持ち、後述する埋葬部主軸に直交して置かれていた浮石質角閃石安山岩までの平面距離は約5mであつた。

墳丘の頂上部は著しく攪乱されていたため、墳丘高の測定は不可能であつた。

(ロ) 埋葬施設

墳丘頂上部の表土を除去した時に、

礫を含んだ河原砂が墳丘南西部の葺石根石列と平行または直交する一辺約4mの範囲で分布し、河原砂の中から埋葬施設石組及び埋葬部が発見された。しかし、後世に墓地として利用されたため攪乱が著しく、埋葬施設はその底部を残すのみであつた。

施設の中央には、幅80cm、長さ2m25cmの矩形の範囲で小礫を含んだ黄褐色の河原砂が認められ、河原砂の上面から埋葬遺物が発見されたためこの範囲を埋葬部と判定した。その主軸はW40°Sの方向であり、墳丘南西部の葺石根石列とほぼ直交する。埋葬部床面のレベルは、墳丘南西部の葺石根石から1m30cmを測定し、平坦な面を呈していた。河原砂は平均10cmの厚さを持ち、その下は直接に墳丘積土となつていた。また床面上の調査作業中に径10cm程度の河原石数個に付着した赤色有機物を発見した。

墳丘南西部の葺石寄りの埋葬部床面と隣接した位置には、埋葬部主軸と直交して長径85cm、短径30cmの浮石質紡錘状の角閃石安山岩が発見された。

埋葬部の長辺に隣接した部分は、幅約40cmで墳丘積土が露出していた。

埋葬部の周囲からは、床面を囲むような形状で外幅約2m80cm×4m30cmの石組が発見された。石組には径10cm×40cm、厚さ5cm～20cmの河原石が用いられ、攪乱されていたため最も残つているところで高さ約30cmであつた。埋葬部の東側の短辺付近の石組は弧状を呈して残つていたのに対して、西側の短辺付近は殆んど原形を止めていなかつた。

(ハ) 遺物

埴輪は細片がわずかに発見されたが、本古墳に副葬されていたとするには疑がいがある。土師器、須恵器も細片がわずかに採集されたが器形すら判別できないのが大部分であつた。また、本古墳が後世に墓地として利用された際の人骨頭部、銅銭2枚が発見された。

鉄鏃、鏃片は多く発見されたが身の形を判別できるのは3本のみで、いずれも原位置を移動しているものと推察された。

鉄鏃1，2は尖根型柳葉式に分類される。茎部は欠損し、身部の先端から7cm程度の小部分である。身部長2cm余、身部幅1cm1mm、身部厚さ2～3mm、箆被部幅5mm、箆被部の厚さ3mm。断面は、身部で片側にのみ丸味を持つ直弓の形で、箆被部は長方形である。

鉄鏃3は片刃箭式に分類される。身部の先端から4cm6mmまでの小部分で身部長4cm、身部背幅3mm、箆被部幅7mm、箆被部厚さ4mm、断面は身部で契形、箆被部で長方形である。

鋌部　地表面下約30cmの位置から発見され、他の部分は伴出せず、原位置を移動しているものと推察された。大刀の鋌部と推定され、鉄製であり、ゆるやかなカーブを持つふくらが認められる。身幅2cm5mm、背幅約9mm、残存部長6cm。

刀子　鉄製であり、埋葬部床面に密着した状態で2本発見された。

刀子1は、鋌部を欠損した長さ13cm5mmの部分で、身幅約1cm5mm、背幅約5mmを測る。茎部は長さ4cm5mm、厚さ4mmを有し、茎先から8mmの位置に径2mmの目釘孔が穿たれている。

刀子2は鋌部を欠損し、茎部も同時に出土したが関部付近を失つていた。比較的保存の良い部分で身幅2cm、背幅6mm、茎幅1cm2mm、茎厚さ3mmを測る。

尾錠　破片が2個発見され、1つは埋葬部床面に密着していた。鉄製であり、有機物が付着し、長さは3cm、3cm2mmを測る。断面は2個とも中央部で径5mmの円形である。

Ⅴ　あとがき

以上、調査の概要を報告したが、発掘調査を行なつた古墳に関して明らかとなつた諸点を付記したい。

上場村第２４号古墳

① 墳丘外部施設としての埴輪及び葺石の存在が推定される円形墳である。

② 南西方向に開口する横穴式石室は、Ｔ字形の平面形を呈し、築造当初より複数埋葬を意図し、その構成には所謂高麗尺＜１尺を約３５㎝とした＞の使用された可能性が強い。

③ 石室の構築法及び玄室部の平面比率は群馬県所在の古式横穴式古墳に類例が求められる。

④ 出土遺物の時代相は、横穴式古墳出土遺物中で古式のグループに属する。

⑤ 広瀬古墳群においては、浮石質角閃石安山岩使用の古墳が多く認められるに対して本古墳からは１石の発見もみられなかつた。

⑥ 以上により本古墳の築造年代は、浮石質角閃石安山岩使用以前であり、しかも珍しい石室の平面形あるいはその比率、または遺物等からして、６世紀の終末から７世紀の初頭にかけての頃と推定される。

大塚北古墳

① １辺約１４ｍの方形墳であり、埴輪の存在は疑がわしい。

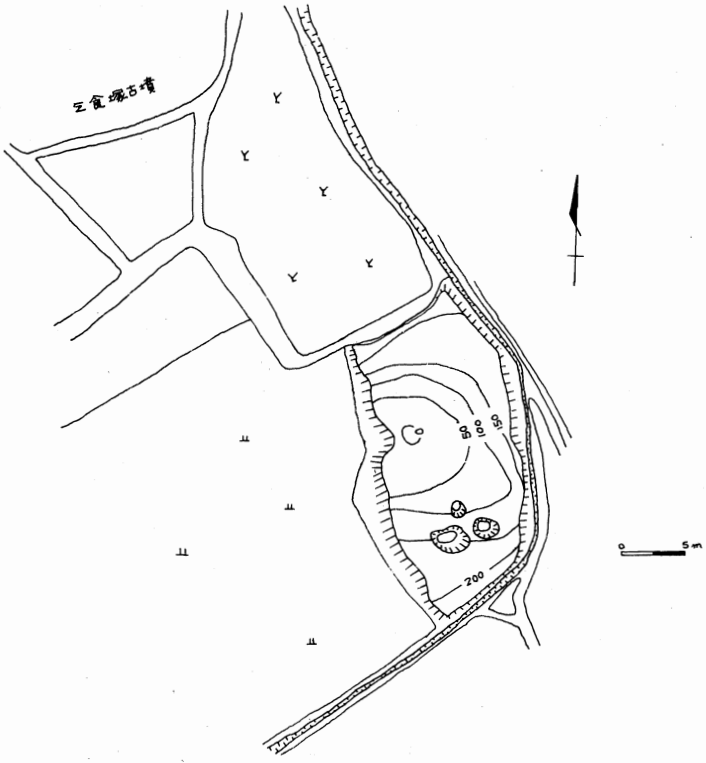
② 竪穴系の埋葬施設をもつものと推定される。

③ 浮石質紡錘状の角閃石安山岩の使用が認められている。

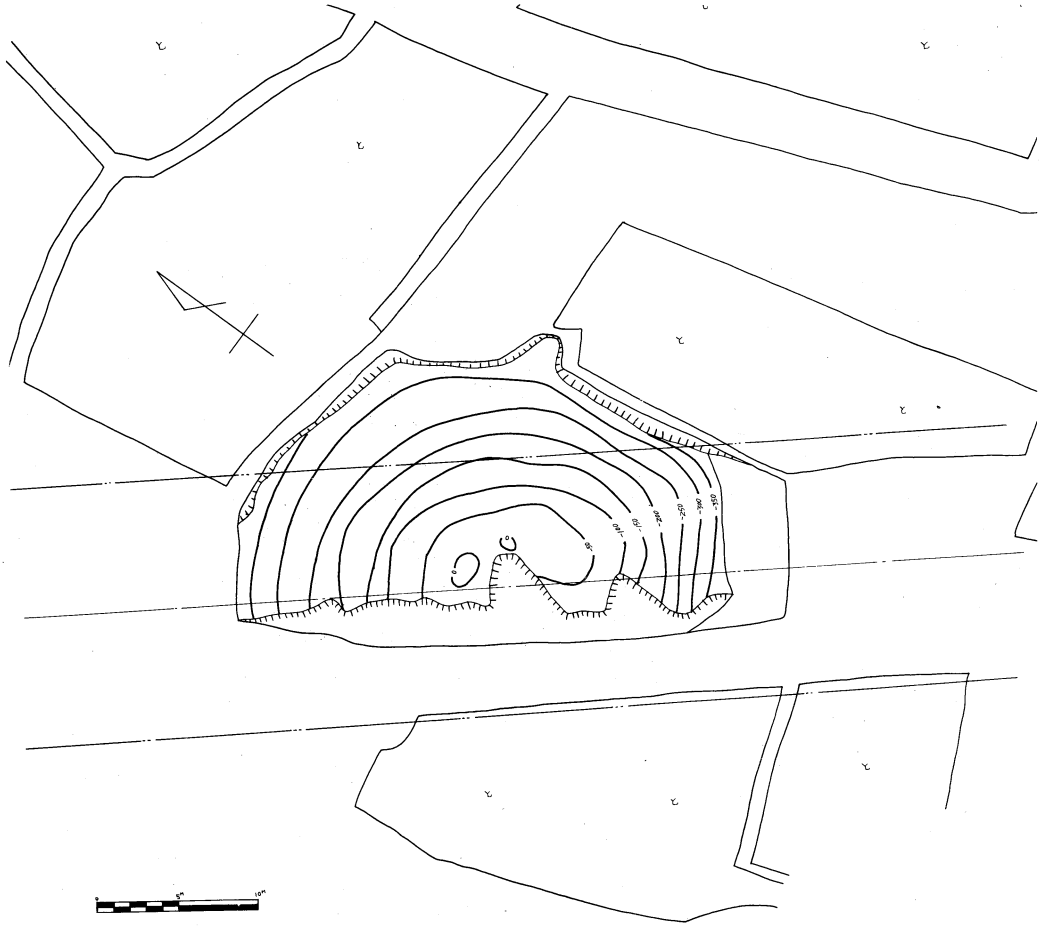
④ 築造年代は７世紀中程以降に求められるがなお検討を要する。

以上により本古墳群調査の報告を一おう終るがこれで調査古墳についての報告がすべて完了した訳ではない。整理検討を集めるに従がつて多くの興味ある問題も生じてきている。しかしそれらについては紙面の関係等もあり記載することができないが、別の機会に公表する予定である。

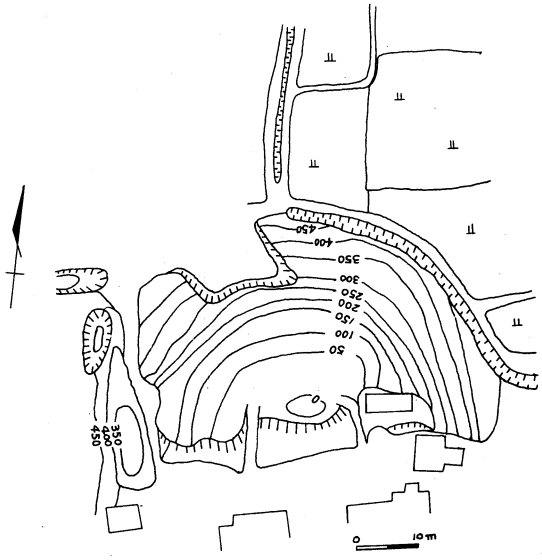
文末ながら、資料を整理するにあたつて県立前橋工業高校歴史研究部の諸君の協力を得た。記して感謝の意を表し、併せて今後更に広い視野からの検討を約束したい。



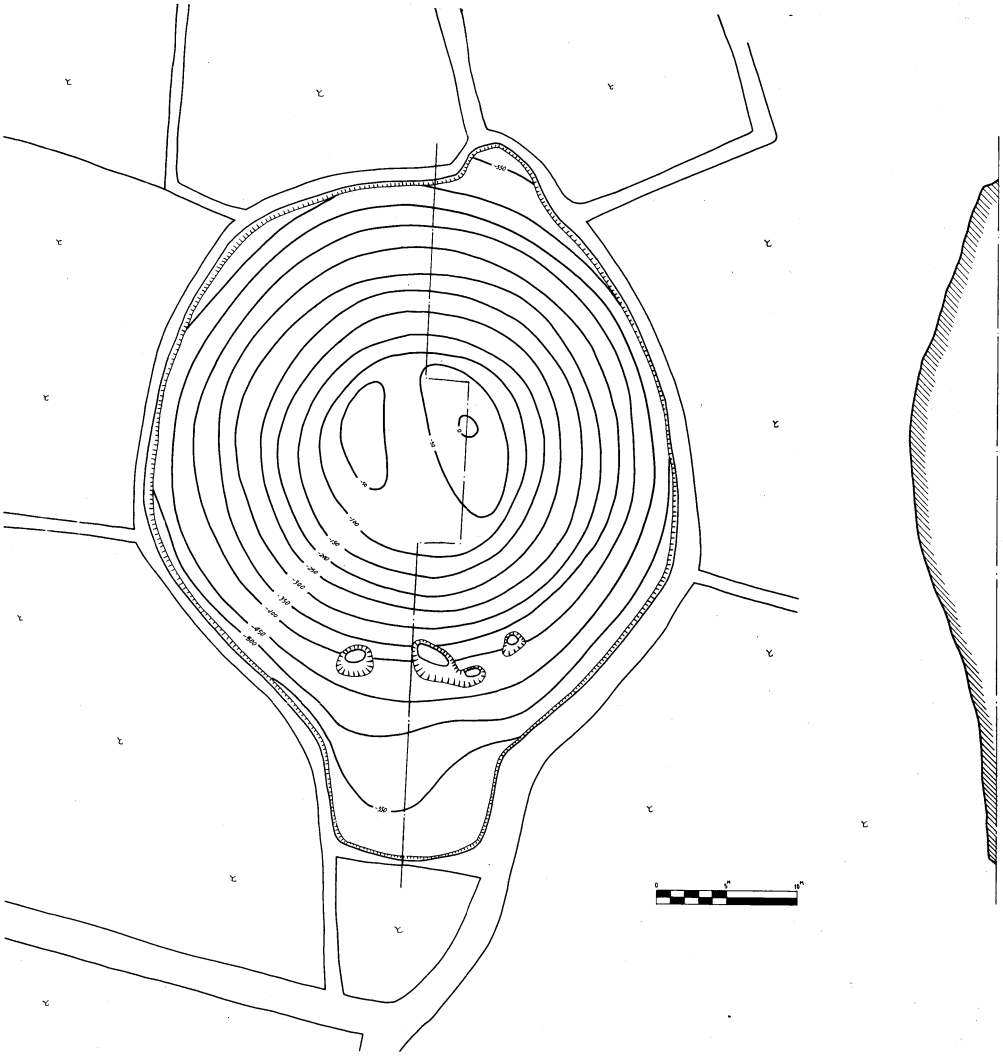
第３図　　ボンゼン山古墳　墳丘測量図



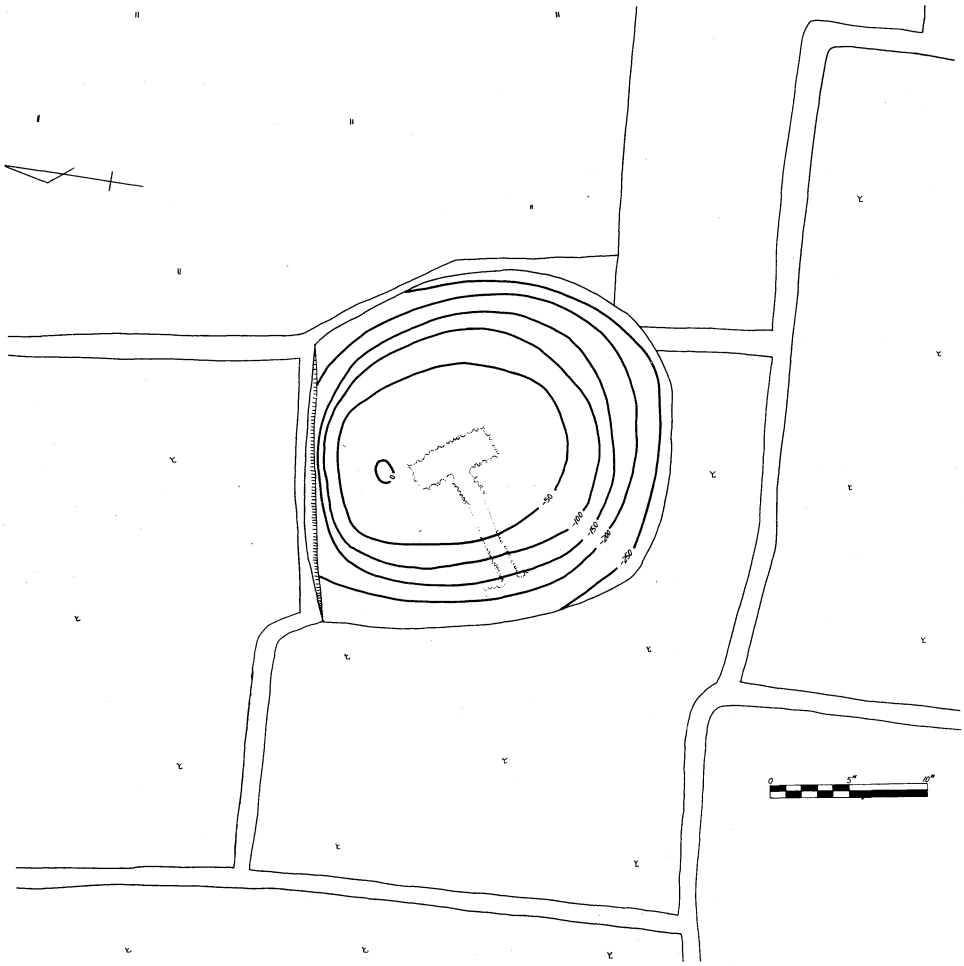
第４図　　オトウカ山古墳　墳丘測量図



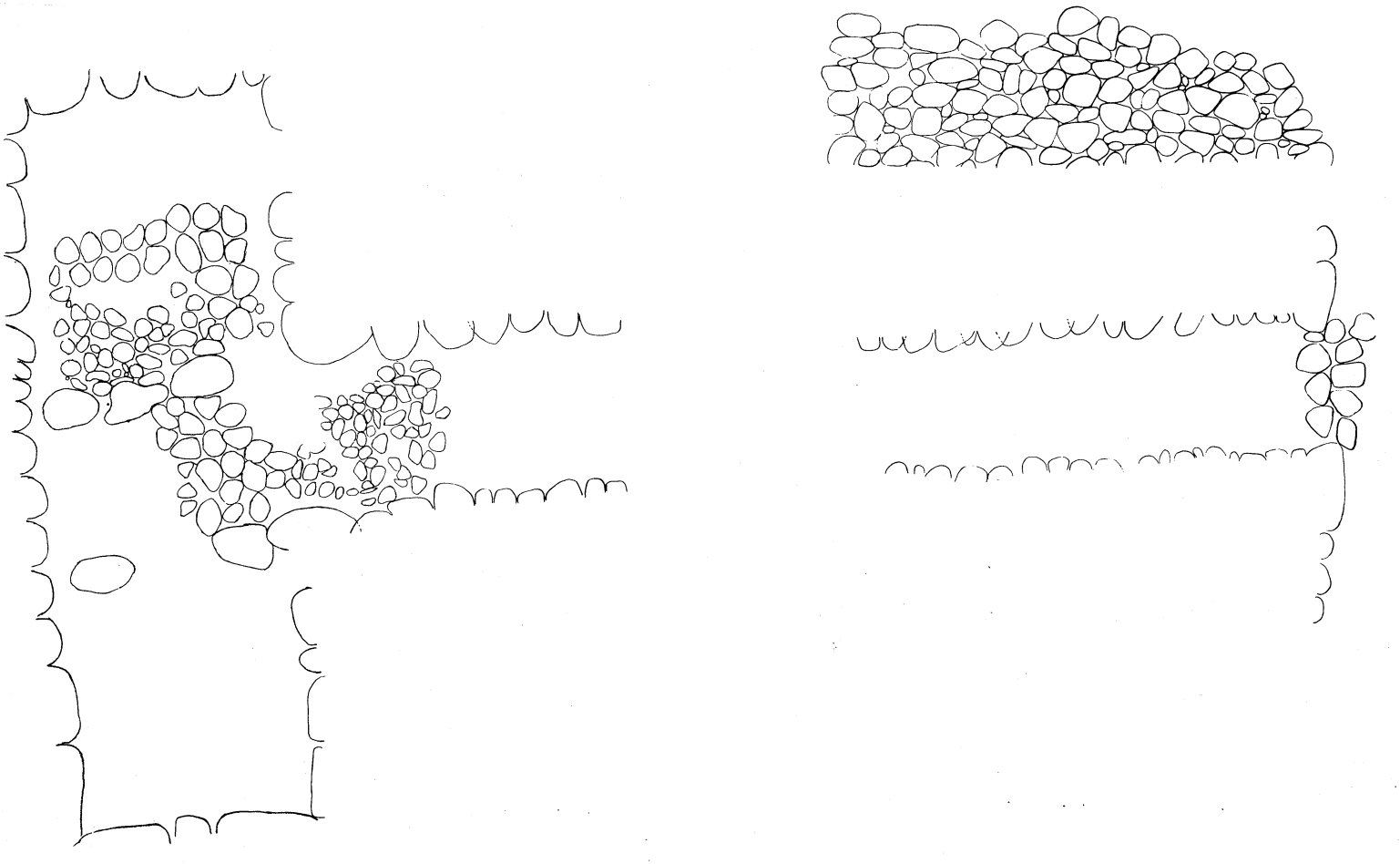
第５図　上陽村第１３号古墳　墳丘測量図



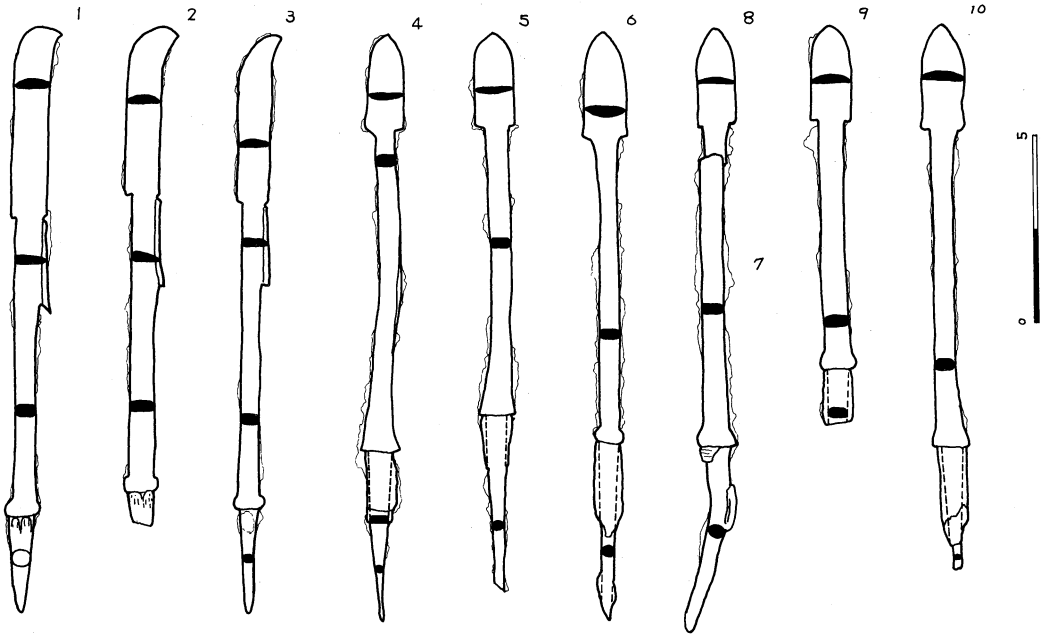
第6図　　亀塚山古墳　墳丘測量図



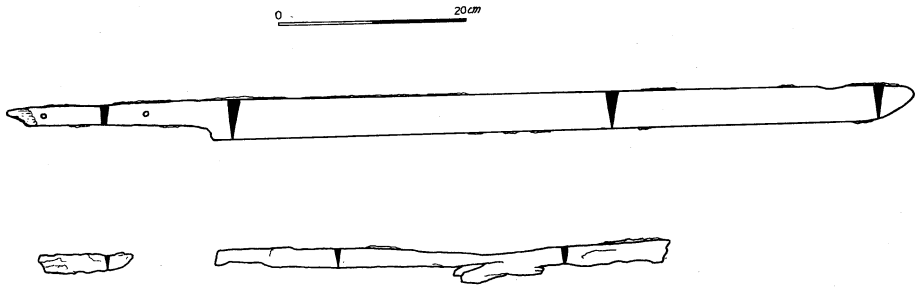
第７図　上陽村第２４号古墳　墳丘測量図



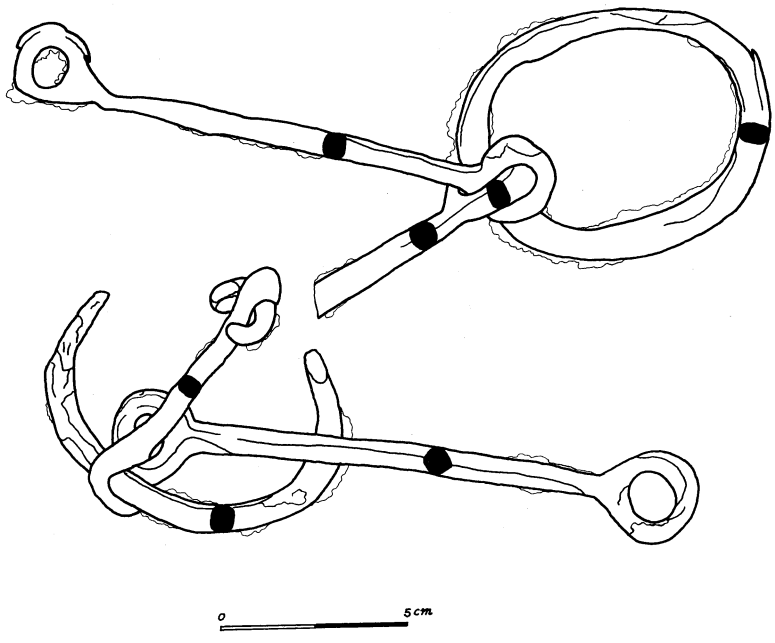
第8図　上陽村第24号古墳　石室実測図



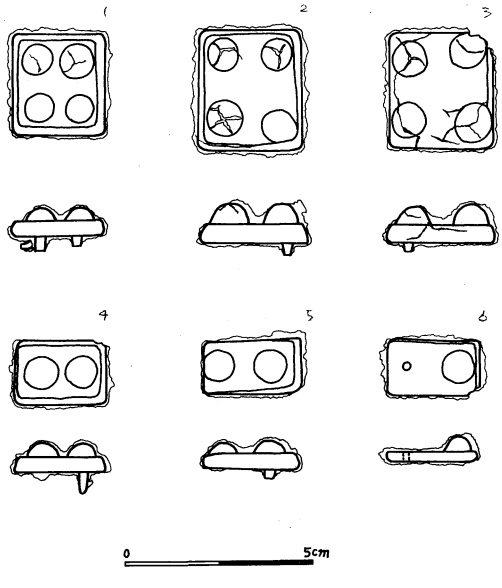
第9図　鉄鏃実測図



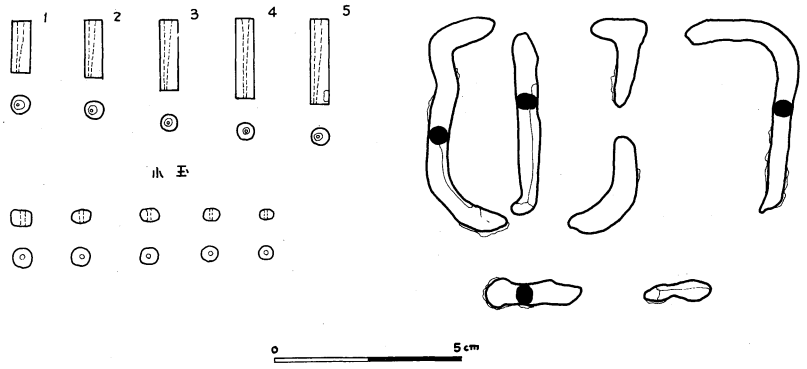
第10図　直刀実測図



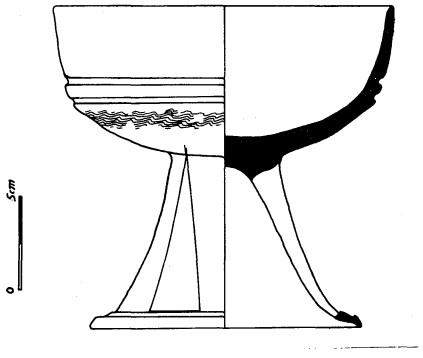
第１１図　轡 実 測 図



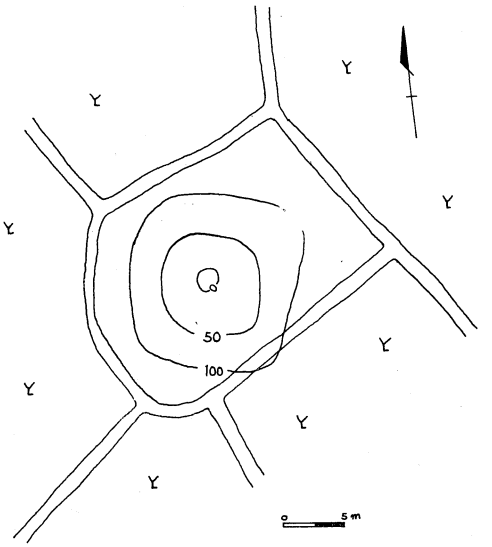
第１２図　鉄 鋲 実 測 図



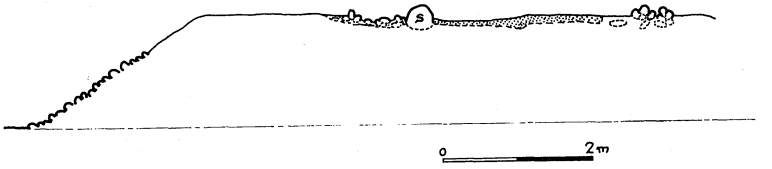
第１３図　玉類及鉄製品実測図



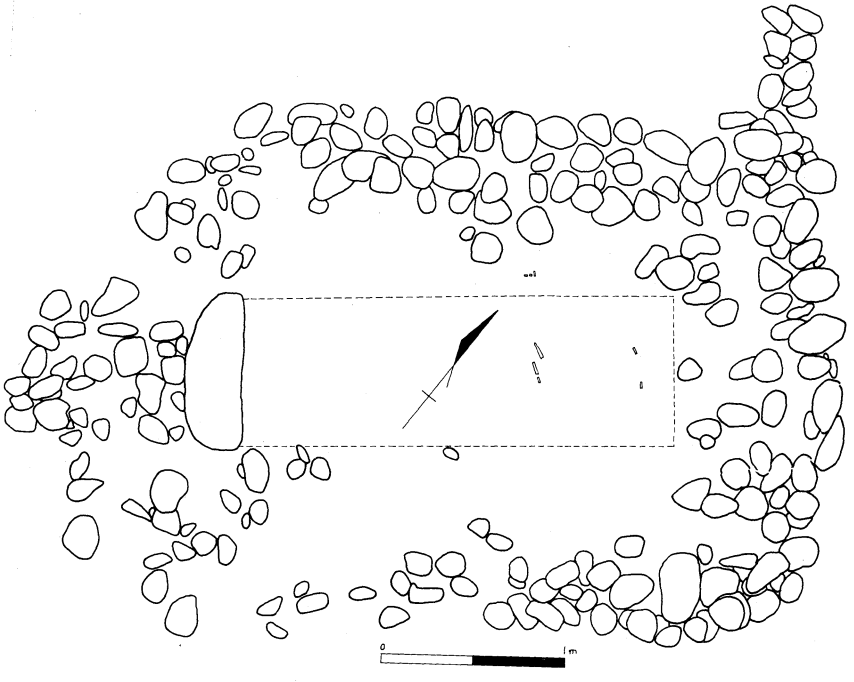
第１４図　　高坏（須恵器）実測図



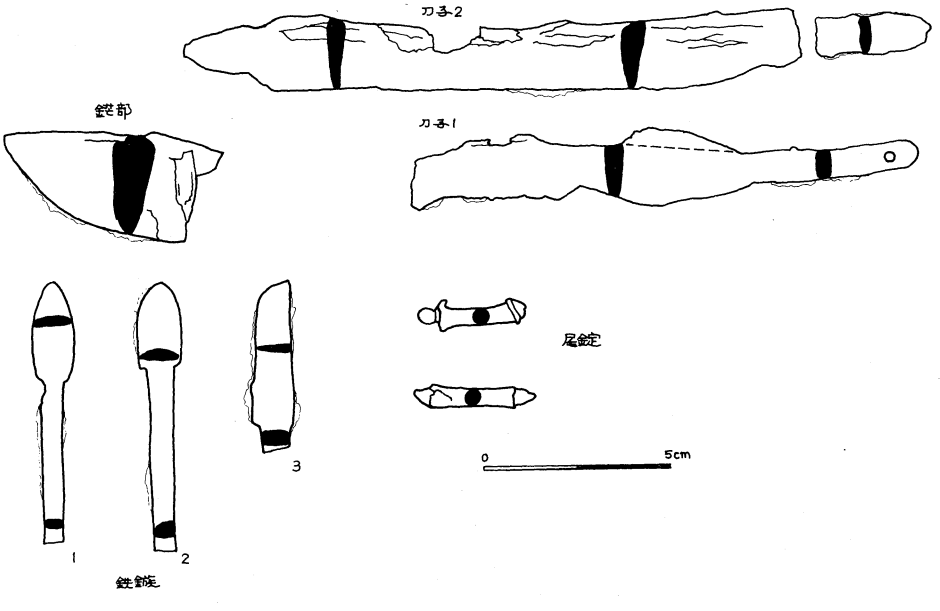
第１５図　　大塚北古墳　墳丘測量図



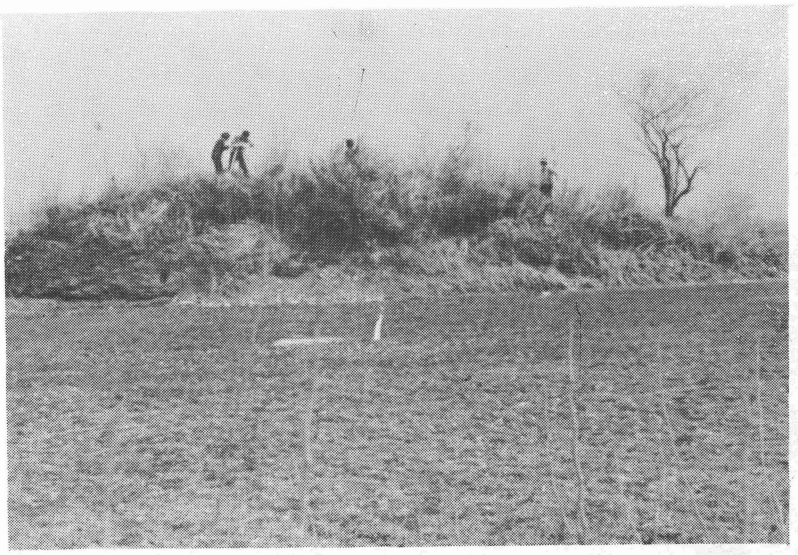
第１６図　大塚北古墳　墳丘断面実測図



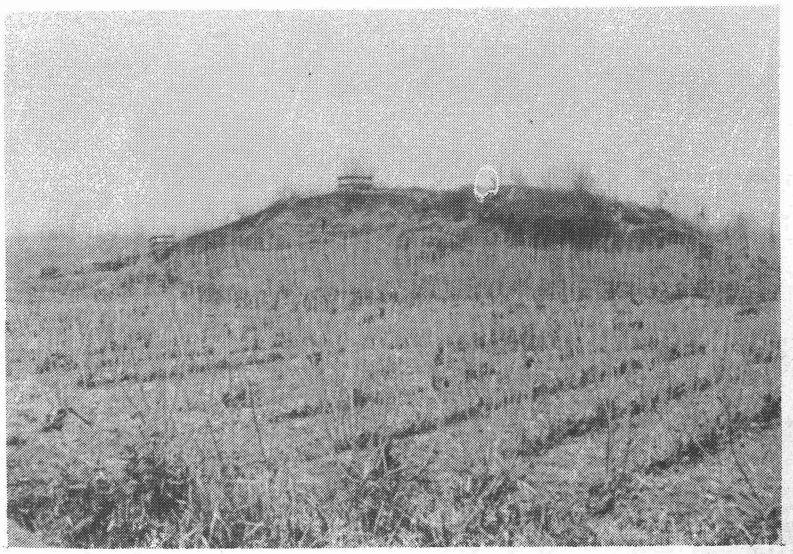
第１７図　　大塚北古墳埋葬施設　実測図



第１８図　　大塚北古墳出土遺物　実測図

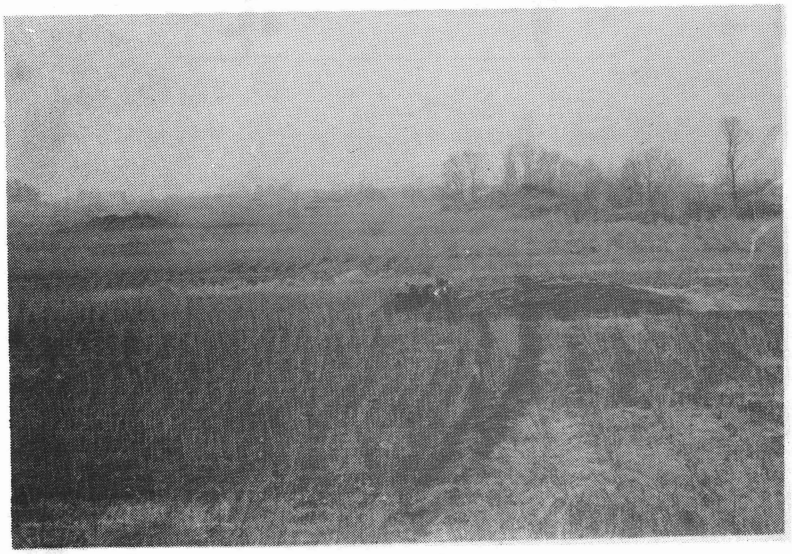


1, ボンゼン山古墳



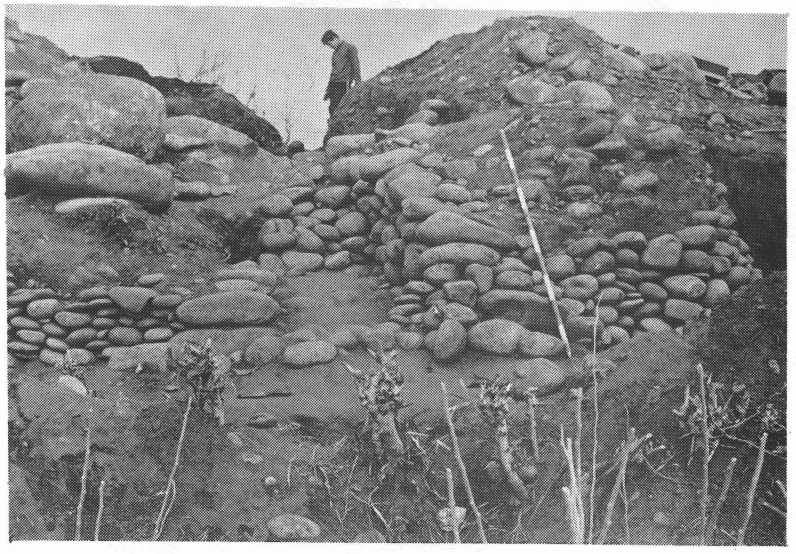
2. オトウカ山古墳

3、亀塚山古墳

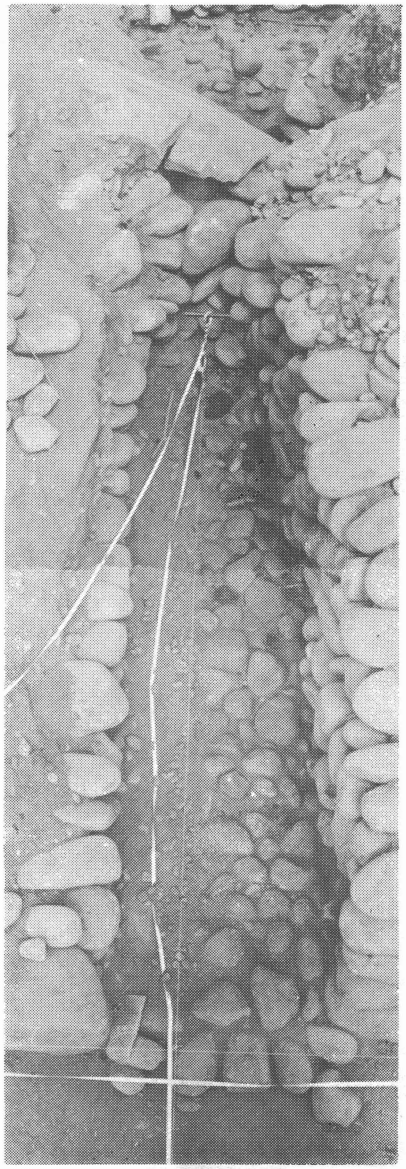


4. 24号古墳及大塚北古墳

5. 24号古墳全景



6. 24号古墳　羨道入口部



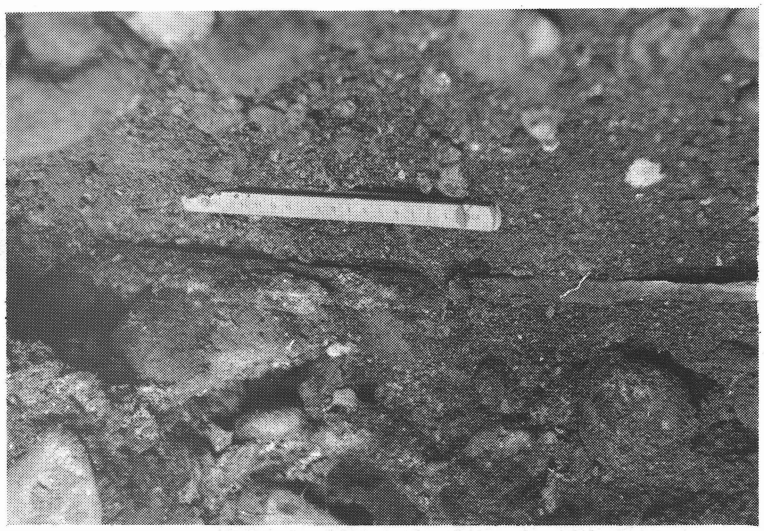
8.　２４号古墳　羨道部

北区

中央区

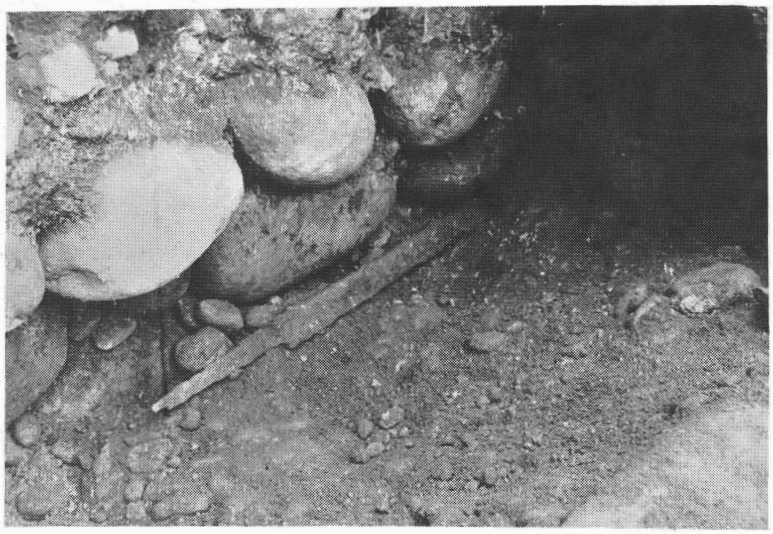
南区

7. ２４号古墳　玄室部

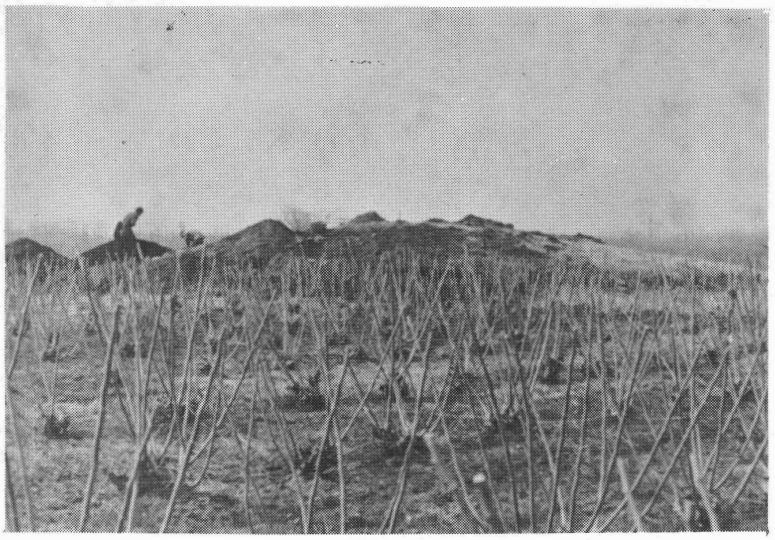


9. ２４号古墳玄室北区　遺物出土状態

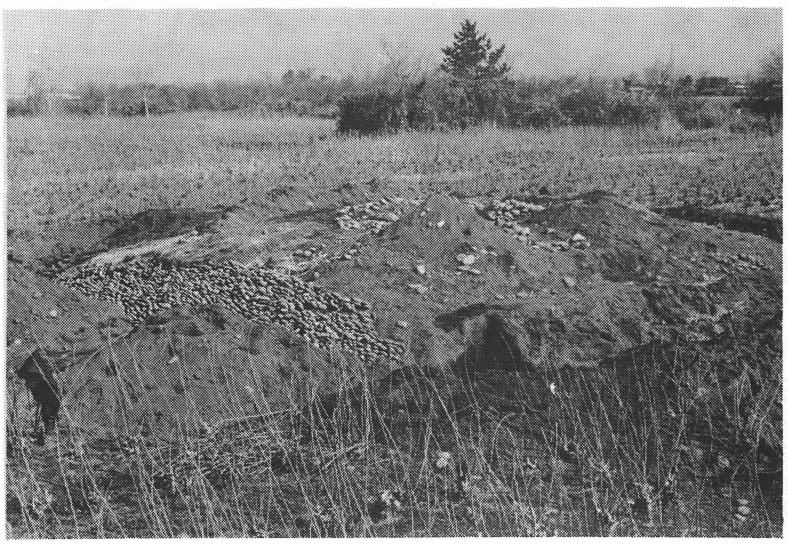
１０. ２４号古墳玄室中央区　遺物出土状態



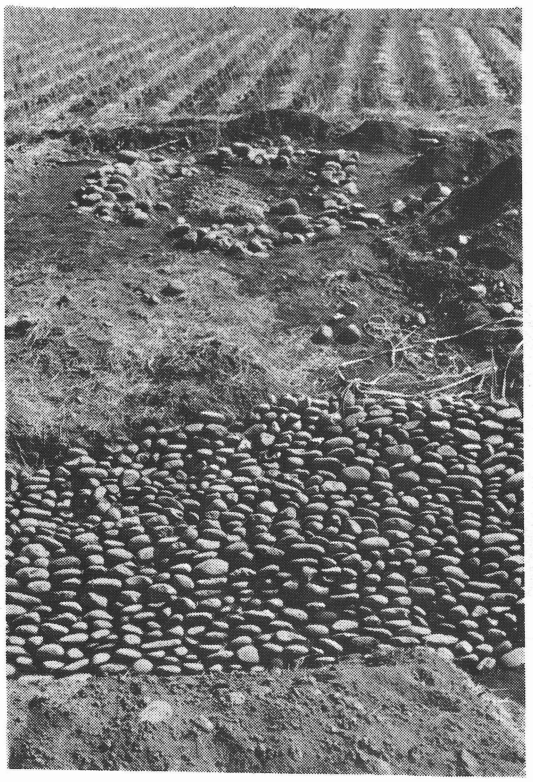
１１．２４号古墳玄室南区　遺物出土状態



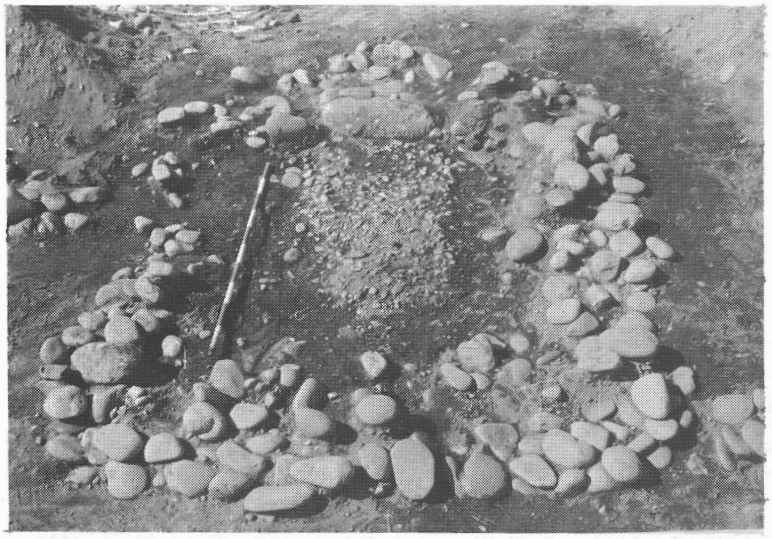
１２，大塚北古墳全景（一）



13. 大塚北古墳全景（二）



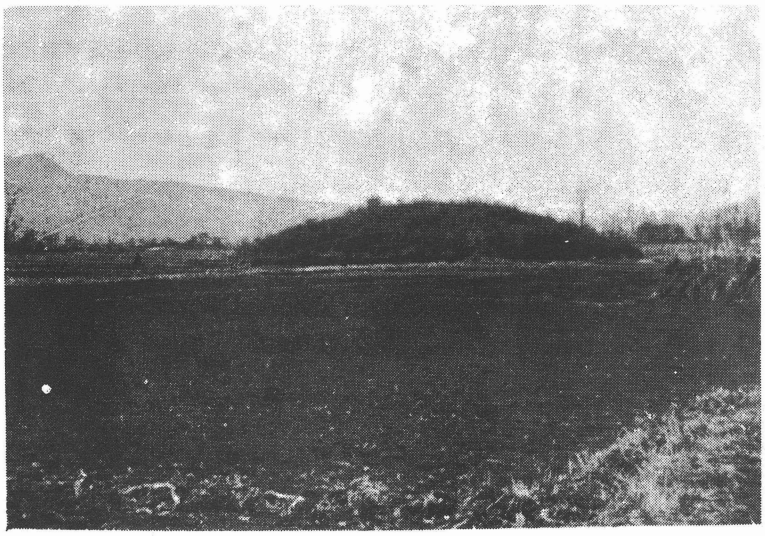
14. 大塚北古墳葺石及埋葬施設



15. 大塚北古墳　埋葬施設

16. 上向家二子山古墳（付）

17. 金冠塚（二子山）古墳（付）



18. 山王大塚古墳（付）

編　集　後　記

広瀬団地は総工費４億余円で４１年５月着工、１３６haを区画整理、住宅団地を３０ha造成１０年間に１２００戸を建てるという大規模な土木工事であつた。このため団地内の八幡山、天神山金冠塚など６３基（古墳総覧）が、この中に含まれたわけである。

５月、文化財調査委員の先生方に現地の現況調査をいただき次のごとき意見具申を開発部局に提出した。

「文化財（特に埋蔵文化財である古墳）の破壊は都市区画整理事業とは相反するところであり、先人が築きあげた遺産は保存していくことが現代人の義務である。現況調査の結果原型をとどめているものは数少ないが、内部構造や、遺物については発掘調査をしてみなければ明確なことはいいえない。区画整理にあたつては、充分留意し、遺物の処置を行われたい。破壊を禁ずるのは教育文化、風致上重要であるからである。

現状の中で公園化して保存をされたい。山王地区、禅養寺周辺は中世の遺構も含まれているので保存する必要がある。

区画整理（整地）以前に発掘調査を実施し記録保存をはからなければならない。」云々

以後、開発は急速に進められ、手をこまねいている間にメインストリートはブルトーザーにより貫通された。オトウカ山は半分姿を消したのである。４２年３月、前橋工業高等学校松島栄治先生に委頼し、緊急発掘調査を開始したのである。前工、前高、前女の生徒諸君には、春休みにもかかわらず、禅養寺を宿舎として協力をいただいた。感謝の意を表したい。

今回、この報告書を発刊するに当り、滅失した古墳のみたまをとむらい、学術的な記録保存を後世に伝達できることをよろこぶものである。

おわりに

調査担当の松島栄治先生、前工ＯＢの笹沢君に厚く敬意を表し後記といたしたい。

昭和４５年３月　　前橋市教育委員会社会教育課

社会教育主事　阿久津　宗　二

昭和４５年３月２０日印刷
昭和４５年３月２５日発行

前橋市文化財調査報告書
第１集

編　集　前橋市教育委員会社会教育課
兼発行　前橋市大手町二丁目１１－１ (24) 1111
印　刷　前橋市城東町四丁目６－４
平野プリント　(31) 2900